



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



関係節の定義と述語タイプ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塩谷, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/624

関係節の定義と述語タイプ

その他（別言語等） のタイトル	Definition of relative clauses and predicate types
著者	塩谷 亨
雑誌名	室蘭工業大学研究報告．文科編
巻	46
ページ	93-110
発行年	1996-11-08
URL	http://hdl.handle.net/10258/624

関係節の定義と述語タイプ

塩谷 亨

Definition of relative clauses and predicate types

Toru Shionoya

Abstract

This paper has two goals. In the first half, this paper will re-define relative clauses of different kinds of languages, with emphasis on Hawaiian. Although relative clauses in other languages have similarity to English, the identification of the relative clause in other languages is not consistent because of variation in syntax. This paper will propose a definition of the relative clause which can be used regardless of the variation in syntax. The revised definition will consist of two parts:

- (1) a relative clause has a structure of one of possible predicate types in that particular language, and
- (2) a noun modified by a relative clause corresponds to an element inside of the relative clause.

The above definition makes it possible to generalize relative clauses in different kinds of languages.

In the second half, this paper will analyze relative clauses in Hawaiian, using the above definition. In doing so, two types of relative clauses(i.e., the verbal relative clause and the prepositional relative clause) will be introduced.

1 序 論

関係節という構造は英語においては明確に定義されていて、何を関係節とみなすかについての基準は一貫している。英語以外のいろいろな言語にも英語の関係節に対応するような構造が存在するが、それぞれの言語の個別的特徴の違いから、何を関係節とみなすか、或いは、そもそもその言語に関係節とみなされる構造が存在するかということについての基準は必ずしも一貫していない。本稿の前半では、関係節の定義の二つの対照的な例を示し、それらを出発点として、英語及び英語以外の様々の言語の関係節を記述し、一般化するためには

どのような定義がより効果的なのかということについて考察する。また、後半では、前半の議論の結果として提案された関係節の定義を用いて、ハワイ語にはどのような関係節があるか、また、それぞれがどのような手法で形成されるかの記述を試みた。

2 関係節の定義

2.1 伝統的英語文法における関係節の定義

一般に、関係節とは名詞を修飾する節の一種を指すが、伝統的な英語文法においては関係節はかなり狭く定義され、名詞を修飾する他の要素と区別される。例えば、Quirk et al.(1985 :1244)は関係節を動詞を後置修飾する定動詞節のうちの一つのタイプとして分類している。従って、名詞の修飾している要素が関係節か否かは、それが定動詞節かどうかによって決まる。定動詞節は時制（現在、過去、未来）・法（直接法、命令法）の文法的区別を持つ動詞を含むものであり、不定動詞節、すなわち時制・法の文法的区別を持たない動詞を含む節と区別される。例えば、

- (1) The news that appeared in the papers this morning was well received.

[Quirk et al. 1985 :1244]

(1)の下線部は名詞<news>を後置修飾しており、かつ、時制（過去）という文法的区別を持つ定動詞<appeared>を含む定動詞節である、従って関係節の例である。それに対して、

- (2) The person writing reports is my colleague.

[Quirk et al. 1985 :1263]

(2)の下線部はいわゆる分詞による名詞修飾の例であるが、(1)の下線部と同じく名詞を後置修飾しているにも関わらず、時制・法の文法的区別を持たない動詞<writing>を含む不定動詞節であるため関係節とはみなされない。また、定動詞節は常に主語を持つということによっても不定動詞節から区別される。従って、(2)の斜線部は主語に相当するものを持たないという理由からも関係節から除外される。(定動詞は常に主語を持つということを含めてその他の定動詞節の特徴については[Quirk et al. 1972 :722]を参照。)

名詞を修飾する定動詞節には関係節の他にもう一種類ある、それは同格節である。例えば、

The news that the team had won calls for a celebration.

[Quirk et al. 1985 :1244]

(3)の下線部は名詞<news>を修飾しており、かつ時制の文法的区別を持つ動詞<had won>を含む定動詞節であるが、これは関係節ではなく同格節である。関係節も同格節も同様に名詞を後置修飾するものであるが、両者は次のように識別できる。先行する名詞（つまり、後続する修飾節によって修飾される名詞）に相当するものが後続の修飾節においてなんらかの文法関係（主語、目的語、又は場所等の斜格相当語）を担っている場合は、その後続する修飾節は関係節である、例えば、

(4)=(1) The news that appeared in the papers this morning was well received.

[Quirk et al. 1985 :1244]

(4)の下線部は名詞を修飾する関係節であるが、先行する名詞<news>（つまり関係節によって修飾される名詞）は関係節における主語に相当する。一方、同格節は、先行する名詞との間にこのような文法関係の対応はない。同格節は単に先行する名詞の内容を表すものである、例えば、

(5)=(3) The news that the team had won calls for a celebration.

[Quirk et al. 1985 :1244]

(5)の下線部は同格節であるが、先行する名詞<news>は同格節における何の文法関係にも相当しない。同格節は単に名詞<news>の内容を示しているだけである。

ここで、英語における関係節の定義をまとめると、

- (6) 関係節は名詞を修飾する定動詞節、すなわち、時制・法の文法的区別を持ち、常に主語を伴う節であり、先行する名詞（つまり、後続する関係節によって修飾される名詞）は後続の関係節内のなんらかの要素に対応する。

英語以外の色々な言語に対応しようとするとこの英語における関係節の定義はかなり狭いものであることがわかる。Comrie(1981 :136)が指摘するようにこ

の定義には英語独特の個別的特徴が含まれている。例えば、上記(6)の定義に含まれている時制・法の文法的区別は英語では必須な要素であるが、ハワイ語等のように時制・法の文法的区別が必須ではない言語も多くある。例えば、

(7) Ua hele ke kanaka.

ASP go the man

"He has gone."

[Elbert and Pukui 1979 :59]

(7)では<ua>によって文法的に表されているのは相（完了相）だけでありそれだけでは現在、過去、未来のいずれの時制にも使われ得る。従って、時制は文脈により意味的にのみ示されている。このように独立節でさえ時制・法を文法的に表さなくてもよい言語では、関係節の定義に時制・法の文法的区分という条件をいれるのは疑問である。また、主語に関しても同様で、ポリネシア諸語や日本語などのように、必ずしも文が主語を含んでなくてもよい言語が多数ある。

しかしながら、このような関係節の狭い定義は英語のように色々なタイプの要素が名詞を修飾し得る言語では効果的であると思われる。実際にこの定義によって、関係節が他の名詞修飾要素である分詞（上記例文2参照）或いは、同格節（上記例文3参照）から明確に区別され得ることは既に述べた通りである。

2.2 Keenan and Comrieによる関係節の定義

Keenan and Comrie(1977 :63)は英語以外のいろいろな言語を含め関係節の一般化を可能にするために、個別言語ごとに差異を示すような統語論的な要素を一切排除して純粋に意味論的な関係節の定義を次のように提案した。

(8) まず対象がより大きな集合として特定され、それからある文（つまり、限定節）が真であるようなより小さい集合に限定される場合、そのような統語的構造が関係節である。

例えば、上で示した例文1にこの定義をあてはめると、

(9)=(1) The news that appeared in the papers this morning was well received.

[Quirk et al. 1985 :1244]

(9)ではまず<news>がより大きな集合「ニュース」を特定し、それから下線部が真であるようなより小さい集合「今朝新聞に出たニュース」に限定されてい

る。従って、この構造は関係節とみなされる。

しかしながら、この定義は非常に広いもので、実はこの定義の意味するのは名詞を修飾する構造は全て、それがどんな構造であれ、関係節とみなされるということである。Comrie(1981 :136-7)が指摘しているように、名詞を修飾する定動詞節はもちろん、2.1節で示した伝統的英語文法の定義では関係節とみなされなかった分詞も、さらには限定用法の形容詞まで関係節の中に含まれる。

(10)=(2) The person writing reports is my colleague.

[Quirk et al. 1985 :1263]

例文10では、まず<person>が大きな集合「人」を特定しそれから下線部が真であるようなより小さい集合「レポートを書いている人」に限定している。

従って、これは関係節とみなされる。また、

(11) The good student all passed the examination. [Comrie 1981: 137]

例文11の下線部<good>は限定用法の形容詞であるが、ここでも、まず、<student>が「学生」という大きな集合を特定し、次に<good>が真であるようなより小さな集合「よい学生」に限定されるので、関係節の例とみなされる。また、Comrieは指摘していないが、この定義に依れば名詞を修飾している前置詞句も関係節とみなされることになる。例えば、

(12) This book on grammar

[Quirk et al. 1972: 883]

例文12の下線部は名詞を修飾する前置詞句であるが、まず、名詞<book>「本」という大きな集合を特定し、次に、下線部が真であるようなより小さな集合「文法に関する本」に限定している。従って、関係節の定義に当てはまる。

この定義が多くの言語にその統語的特徴の違いに関わらず適用できるのは事実である。しかし、このように、関係節の中に分詞、形容詞、前置詞句等全ての名詞修飾要素を含めてしまうような定義に依る以外にいろいろなタイプの言語の関係節を捉える方法はないだろうか。狭い意味での関係節だけで独立した項目としていろいろな言語に適用できるような定義はないのだろうか。

2.3 関係節の再定義

前の二つの節で述べたように、伝統的英語文法における関係節の定義も、Keenan and Comrieによる定義も、いろいろな言語の関係節を記述するには十分なものであった。この節では、それらに代わる関係節の定義を試みる。

伝統的英語文法における関係節の定義では、関係節は定動詞節に限られていて、その定動詞節の条件というのは時制・法の文法的区別を含むということであった。その条件が、ポリネシア諸語等のように時制・法の文法的区別が必須ではない言語においては問題となるものである。そこでMosel and Hovdhaugen(1992: 632)はポリネシア語の一つであるサモア語の記述において、伝統的英語文法の関係節の定義を一部修正して、時制・法の文法的区別は持っていないくても、相<aspect>の文法的区別を持っている動詞節であれば関係節とみなすような定義をしている。この修正された定義はサモア語の記述に関してはうまく働いたようである。このように、相の文法的区別を持つ動詞節を含めると、英語で名詞を修飾する分詞も関係節に含まれてしまうことになる。なぜなら、<being>や<having>を使うことによって分詞も相を文法的に表せるからである。

Mosel and Hovdhaugen (1992: 632)の定義も、ハワイ語に適用しようとする、問題が生じる。サモア語の文では原則的に、時制・相の文法的な区別は、命令文を除くと、必須であるが、ハワイ語では、時制や相の文法的区別を示さないような文が頻繁に見られる。例えば、

- (13) Makemake 'oia i ka u'i.
 like he ACC the beauty
 "He likes beauty."

例文13の動詞<makemake>には時制・法、或いは、相の文法的区別は表されていない。このように、時制・法、或いは、相の文法的区別は独立した文でさえ必須ではないので、それを関係節の必須条件として含めるのは問題がある。また、ここでもう一つ考えたい問題がある。そもそも、関係節は必ず動詞を含んでいなければいけないのであろうか。英語では全ての文は動詞を含んでいるので問題はない。しかし、ポリネシア語のように英語の<be>動詞に相当するもの

が存在しない言語では、全く動詞を含まない独立した文が存在する。

ここで、そもそも、伝統的英語文法の関係節の定義の中に「定動詞」という条件が入っている理由は何であるのか考えてみたい。Quirk et al. (1972 : 722)によれば英語では定動詞節はかならず主語と述語を含むとされている。実際、英語において述語を形成できるのは定動詞節のみである、不定動詞節、或いは、動詞節以外のものは述語を成さない。つまり、伝統的英語文法において「定動詞節」という条件によって定義しようとしたものは、述語だということが分かる。英語の場合には、たまたま、述語=定動詞であるが、他の多くの言語ではそれが成り立たない。ここに、関係節の定義を英語以外の言語に適用する上で生じる諸問題の原因があるようである。それでは、この述語という概念を用いてより効果的な関係節の定義ができないだろうか。ここで伝統的英語文法の関係節の定義の中の定動詞節という条件の代わりに述語という条件を入れて次のような定義を提案する。

(14)関係節は次の二つの条件を満たすものとする。

- (i)その言語において可能な述語に相当する構造を持つこと、
- (ii)関係節は名詞を修飾し、その被修飾名詞が関係節内におけるなんらかの要素に相当すること。

この定義を英語に適用した場合は、英語では述語=定動詞なので、伝統的英語文法での関係節の定義と同じ結果となる。この定義には二つの利点がある。「定動詞節」等の個別言語的特徴を含んでいない点で、英語以外の言語に適用する際には、伝統的英語文法の定義よりも効果的である。また、定義の第一項で、述語相当の構造と限定してあるので、英語の分詞、形容詞、前置詞句などから関係節を区別できる。

この定義はある言語でどのような述語のタイプが可能であるかに依存しているので、この定義を適用する際には、それぞれの言語で可能な述語タイプにはどのようなものがあるかということを調べるが必要で、それに基づいて関係節の認定をすることになる。

3 ハワイ語の関係節

3.1 ハワイ語の述語タイプ

前章で提示した関係節の定義をハワイ語に適用するに際して、まず、ハワイ語にどのような述語タイプがあるかを識別しなければならない。ポリネシア諸語においては述語を形成するのは動詞だけではない。動詞述語以外のいろいろなタイプの述語があるということはLazard and Peltzer (1991)がタヒチ語について述べている。Shionoya (1993)がハワイ語も同様に動詞以外のものが述語を導くという分析をしている。ハワイ語の述語タイプは大きく分けて、動詞述語と前置詞述語の二つに分けられる。動詞述語は動詞によって導かれる述語で、動詞の前にはたいてい時制・相マーカ―が置かれるが、必須ではない。例えば、

(15)=(7) Ua hele ke kanaka

ASP go the man

"He has gone."

[Elbert and Pukui 1979 :59]

下線部は動詞に導かれる動詞述語の例である。ここでは動詞は相マーカ―<ua>に導かれている。また、

(16) Makemake 'oia i ka u'i.

like he ACC the beauty

"He likes beauty."

例文16下線部も動詞に導かれる動詞述語の例であるがここでは(15)と違い時制・相マーカ―には導かれていない。

前置詞述語は前置詞によって形成される述語である。前置詞句は、前置詞とそれに続く前置詞の目的語である名詞の二つから成り、動詞或いはなんらかの動詞的要素を全く抜きで前置詞句だけで述語を形成する。例えば、

(17) No laila lākou?

from there they?

"Are they from there."

[Pukui and Elbert 1986: 268]

下線部は前置詞<no>と名詞<laila>から成る前置詞述語の例である。この例文は動詞を一切含んでいない。ただ、全ての前置詞が前置詞述語を導けるのではなく、属格の<a,o>行為者格の<e>、呼格<e>等、前置詞述語を導くことがでない前置詞がある。

かくしてハワイ語では動詞述語または前置詞述語を含む関係節が可能であるということになる。

3.2 ハワイ語における関係節の種類

前の節で提示した関係節の定義の第2項が述べているように、被修飾名詞は関係節における何らかの要素に対応する。Comrie(1981: 140) は被修飾名詞が関係節内のどの要素に相当するかが、どのように関係節内で示されているかによって関係節を分類することを提案しているが、ハワイ語の関係節には次の3つの種類がある。

(18)被修飾名詞が関係節のどの要素に対応するかを示すものがないもの。

以下これをコムリー (1994 :85) にならって空所型関係節と呼ぶことにする。

(19)被修飾名詞に対応する代名詞が関係節にあるもの。

以下これをコムリー (1994 :84) にならって代名詞残留型と呼ぶ

(20)被修飾名詞に照応する前方照応指標<ai>が関係節内の動詞の後に置かれるもの。

これは、コムリー (1994 :84) の言う代名詞残留型の変種であろうと思われるが、ハワイ語では、上記の(19)としてあげたようなより典型的な代名詞残留型関係節が別に存在するので、それと区別するために、以下これを前方照応型関係節と呼ぶことにする。次の節では、これら三つの用語を用いてハワイ語の関係節の記述をする。

3.3 ハワイ語の関係節の例

3.3.1 動詞述語

3.3.1.1 被修飾語が主語に対応する場合

ハワイ語において許される述語タイプの一つは動詞述語であり、その動詞述語から成る関係節が可能である。被修飾名詞が関係節内の主語に対応する場合、空所型関係節が用いられる。

(21)	ka	holoholona	e	<u>pakele</u>	iā	ia
	the	animal		ASP escape	OBL	he

"the animal who escapes from him" HW71

例文21のような一般的な動詞の他にも、存在動詞<aia>「～がある」、や動詞イディオム<'akahi>「初めて～する」、否定動詞<'a'ole>も同様に動詞述語として関係節を形成できる。

(22) he 'āina aia i ka lewa

NC-a land there is OBL the sky

"a land which is located at the sky" L555

(23) ...he pūiwa ka mea 'akahi a 'ike

ASP surprised the person for the first time see

i kēlā mea hou.

OBL that thing new

"...the person who saw that new thing for the first time was surprised."

NK 12/23/1893:4

(24) ...a 'o nā 'āina nō ho'i ia i koe

and NC the-PL land INT it ASP remain

'a'ole i lawe 'ia e Keawenuiaumi

not ASP take PAS by Keawenuiaumi

"...and they are the remaining lands that were not taken by Keawenuiaumi." Pk33

例文22-24ではそれぞれ下線部が空所型関係節であり、いずれの場合にも被修飾語は関係節内の主語に対応するものである。

3.3.1.2 被修飾語が主語以外に対応する場合

被修飾名詞が関係節を成す動詞述語の主語以外の項である場合は、前方照応型関係節が用いられる。その際に関係節内の主語は所有形としてしばしば表され関係節の前に置かれる。具体的には前方照応型関係節が用いられるのは被修飾語が次の例文25のように関係節内の目的語に対応する場合、

(25) ka wai e inu ai

the water ASP drink AP

"the water to drink"

FH 157

或いは、関係節の述べている出来事の起こる場所（例文26）や時間（例文27）、または、どのようにその出来事が起こるかという様態（例文28）に相当するする場合にも用いられる。

(26) kahi a ia 'īlio e noho ai
 place of AD animal ASP live AP
 "the place where that animal lives" HW65

(27) ka wā e mā'ona ai
 the time ASP satisfied AP
 "the time when(they)are satisfied" FH 106

(28) ka wa'a e holo ai kekahi po'e Inikini
 the canoe ASP sail AP some people Indian
 "the canoe by which some Indians sail" Hw 33

ただし、動詞の後ろに未完了を表す<ana>が置かれている場合は前方照応の<ai>は用いられない。

(29) kahi e kaheikaika ana ka wai
 place ASP flow strong DEM the water
 "the place where the water is flowing strongly" HW 47

3.3.1.3 被修飾名詞が主語の所有者に対応する場合

被修飾名詞が主語の所有者に対応する場合は、代名詞残留型関係節が用いられる。すなわち、被修飾名詞に対応する所有格代名詞が関係節内の主語に付される。

(30) ka mea i 'oi aku kona nui ma
 the thing ASP superior DIR its size OBL
 mua o ka rhinoceros
 front of the rhinoceros
 "the thing whose size is bigger than the rhinoceros" HW 9

下線部関係節の主語は<kona nui>であるが、その中の所有格代名詞<kona >が被修飾名詞<mea>に対応している。しかしながら、同じような場合に所有格代名

詞の代わりに定冠詞<ka>が用いられることがある、

- (31) nā holohona i ono ka 'io
 the-PL animal ASP delicious the meat

"the animals whose meat is delicious"

HW 49

例文30では被修飾語が関係節内のどの要素に対応するかは代名詞によって示されていたが、例文31ではそれを示すものが欠如している。従って、この例文31の下線部を空所型関係節とみなすことも可能であろうが、ハワイ語では文脈から明らかな場合は所有格代名詞を定冠詞で置き換えることは関係節内に限らずよくあることなのでここでは代名詞残留型関係節の例外とみなすことにする。

3.3.2 前置詞述語

ハワイ語で許されるもう一つの述語タイプは前置詞句であり、前置詞述語から成る関係節も可能である。被修飾語が関係節を形成している前置詞述語を導いている前置詞の目的語に対応する場合は、代名詞残留型関係節が用いられる。このような関係節の例としてもっとも一般的なのは、前置詞<no,na>「～のための」と3人称代名詞との融合形である<nona,nāna>に導かれる前置詞述語が関係節を成す場合である。

- (32) ua manu nei nāna ka punana

Ad bird this for-it the nest

"this(aformentioned)bird whom the nest belongs to"

L 503

- (33) ke ali 'i nona ke aupuni 'o

the chief 'for-him the nation NC

Hawai 'i

Hawai 'i

"the chief whom the nation of Hawai'i belongs to"

SF 157

しかしながら、希に他の前置詞が導く関係節も見られる。

- (34) ka mea iā ia ke kī o

the thing OBL he/she the key of

ka 'āina...

the land

"the person whom the key of the land is for..." NK 4/1/1894:3

例文34では被修飾名詞<mea>が関係節内の斜格前置詞<ia>の目的語に対応し、それが代名詞<ia>で示されている。

また、被修飾語が前置詞述語から成る関係節内の主語の所有者に対応する場合も、代名詞残留型関係節が用いられる。このような関係節が用いられるのは前置詞<o>に導かれる前置詞述語が関係節を成す場合である。

(35) ...ua hele mai la kekahi keiki 'o
ASP come DIR DEM some child NC

Kekalukaluokewa kona inoa...

K. his name

"...some boy whose name is Kekaukaloukewa came..."

HH 10/15/1908:3

この前置詞<o>は多くのポリネシア諸語に見られる特別な前置詞で、前置詞でありながらはっきりした格を持たないものである。本稿では、ハワイ語の<o>についての詳しい議論はできないが、この<o>の前置詞としての詳しい分析については、Shionoya (1990) のサモア語の<o>についての分析を参照されたい。例文35では関係節内の主語に所有格代名詞<kona>が付されている。3.3.1.3節で示した動詞述語の主語の所有者についての例で、しばしば、所有格代名詞の代わりに定冠詞<ka>が用いられることを述べたが、前置詞述語の場合も同様に、所有格代名詞の代わりに定冠詞<ka>が使われ得る。

(36) k̄ana ā'au palau 'o Wahiekaeka ka inoa
his war club NC W. the name

"his war club whose name is Wahiekaeka" SF 61

また、前置詞述語からなる関係節の特殊な例として、前置詞<na>に導かれる行為者強調構文がある。行為者強調構文は他動詞及び行為を表す自動詞の主語を強調するための構文で英語の分裂文<it is ...who ...>に相当する意味を持つ。その意味からすれば動詞文のように思えるが、その構造はむしろ前置詞句述語に相当する。その構造は、

(37)前置詞na+行為者主語+動詞句+その他

のようになる。例えば次のようなものが行為者強調構文の例文である。

(38) Na lākou nō e huki i ka 'ō'ō palau...

for they INT ASP pull ACC the plow

"It is them who pull the plow..."

HW47

そして、この行為者強調構文が関係節を形成する場合は、被修飾名詞は関係節を導く前置詞<na>の目的語に対応し、前置詞<na>と3人称代名詞の融合形<nāna>がそれを示す。従って、これも代名詞在留型関係節の例とみなし得る。

(39) kā lākou lio nāna e kauō i

k-POS they horse ___ ASP pull OBL

nā ka'a

the-PL wagon

"their horse who pull the wagon"

HW 53

3.4 まとめ

どの種類の関係節がどのような場合に使われるかは以下のようにまとめられる。

(40)被修飾名詞が関係節内の主語に相当する場合、空所型関係節がもちいられる。

(41)被修飾名詞が関係節内の主語名詞の所有者に相当する場合、動詞述語、前置詞述語の別に関わらず代名詞残留型関係節が用いられる。

(42)被修飾名詞が関係節内の主語以外の項に相当する場合、動詞述語なら前方照応型、前置詞述語なら代名詞残留型がそれぞれ用いられる。

3.5 問題点

以上の記述に関して、若干考えるべき問題点がある。今回おこなった分析に従うと、ハワイ語において名詞を修飾する前置詞は全て関係節にみなされることになる。例えば、

(43) ke kāne i ke kula

the man OBL the school

"the man in the school"

例文(43)では前置詞句<i ke kula>が名詞<kāne>を修飾しているが、今回の分析に従うと、前置詞句はハワイ語の中で許される述語タイプの一つであり、実際、

(44) I ke kula ke kāne.

OBL the school the man

"The man is in the school."

例文(44)のような文はりっぱな文として使われる得る。そうすると、例文(43)の下線部は述語に相当する構造を持つことになり、関係節の条件を満たす。被修飾名詞は関係節内の主語に対応し、3.1.1で示した諸例と同様に空所型関係節を形成しているという分析ができる。この分析は一見、奇異に見えるが実際はこの分析には利点もある。名詞の後ろに来る前置詞句が全て名詞を修飾するわけではない、例えば、

(45) Aia ka pā'ina 'ohana ma ka hale'aina

there is the party family OBL the restaurant

Pākē.

Chinese

"The party is at the Chinese restaurant."

[Hopkins 1992: 73]

例文(45)では前置詞句<i ka hale'aina Pākē>は名詞の後ろに来ているが名詞を修飾してののではなく、この文で述べられている事項の場所を示しているものである。ここで、名詞を修飾している前置詞句を関係節として分析することによって、文全体にかかる副詞句として使われている前置詞句と区別をつけることができる。

4 結び

今回提案した関係節の定義に依れば、3章で示したように、ハワイ語の二つの述語タイプから形成されるいろいろな種類の関係節の記述、一般化が可能になる。またこの定義に依れば、英語のように関係節と分詞の間の区別がはっきりしている言語については、それらの間の区分を損なうことなく、更に、関係節を独立し

た一つの項目としていろいろな言語の間で対照、一般化することを可能にする。

(平成8年6月7日 受理)

LIST OF ABBREVIATIONS

Grammatical Terms

ACC:accusative case	INT:intensifier
AD:anaphoric demonstrative	NC:neutral case
AP:anaphoric particle	OBL:oblique case
ASP:aspect marker	PAS:passive marker
DEM:demonstrative	PL:plural marker
DIR:directional	POS:possessive

Hawaiian Texts(see References for further information)

- FH Folktales of Hawai'i.
HH Ka Hoku o Hawaii.
HW O na Holoholona Wawae Eha.
L The Hawaiian Romance of Laieikawai.
NK Nupepa Kuokoa.
PK Moolelo Hawaii o Pakaa a me Kuapakaa.
SF Selection from Fornander's Hawaiian Antiquities and folk-lore.

References

- Beckwith, Martha W. 1919. The Hawaiian Romance of Laieikawai.
Thirty-Third Annual Report of Bureau of American Ethnology to the
Secretary of the Smithsonian Institution 1911-1912, 285-666. Washington:
Government Printing Office.
- Comrie, Bernard. 1981. Language universals and linguistic
typology. Oxford: Basil Blackwell.

- コムリー、バーナード. 1994. 講演〈言語類型論〉入門 下. 月刊言語
23.10 :82-89.
- Elbret, Samuel H.,ed. 1959. Selection from Fornander's Hawaiian Antiquities
and Folk-lore. Honolulu:Universty of Hawai'i Press.
- Elbert, Samuel H. and Mary K.Pukui. 1979. Hawaiian grammar.
Honolulu: University of Hawaii Press.
- Hopkins, Alberta P. 1992. Ka lei ha'aheo. Honolulu: University of
Hawaii Press.
- Keenan, Edward L. and Bernard Comrie. Noun phrase accessibility
and universal grammar. Linguistic inquiry. 8.1:63-100
- Lazard,Gilbert and Louise Peltzer. 1991. Predicates in Tahitian.
Oceanic linguistics. 30.1: 1-31.
- Mo'okini, Esther T. 1985. O na Holoholona Wawae Eha o ka Lama Hawaii.
Honolulu:Bamboo Ridge Press.
- Mosel, Ulrike and Even Hovdhaugen. 1992. Samoan Reference Grammar.
Oslo:Scandinavian University Press.
- Nakuina,Moses K. 1990. Moololo Hawaii o Pakaa a me KuaPakaa.
Honolulu:kalamaku Press.
- Pukui,Mary K. and Laura C. S. Green. 1995. Folktales of Hawai'i. Honolulu:
Bishop Museum Press.
- Pukui, Mary K. and Samuel H. Elbert. 1986. Hawaiian dictionary.
Honolulu: University of Hawaii Press.
- Quirk, Randolph, et al. 1972. A comprehensive grammar of the
English language. London: Longman.
- Quirk, Randolph, et al. 1985. A grammar of contemporary English.
London: Longman.
- Shionoya, Toru. 1990. Non-verbal predicates in Samoan. Nagoya
working papers in linguistics. 6:229-241.

Shionoya, Toru. 1993. Hawaiian predicates. Nagoya working papers
in linguistics. 9:83-94.

Hawaiian Newspapers

Ka Hoku o Hawaii. Hilo, 1906-1948.

Ka Nupepa Kuokoa. Honolulu, 1861-1927.